

7. コース案内

B隊コース隊長 岸田誠司（三重県立神戸高校）

(1) 三池岳・釈迦ヶ岳コース (A2・B2)



八風キャンプ場駐車場

八風キャンプ場駐車場でバスを降りたらすぐに、役員の指示に従ってアスファルト道を進む。500 mほどでアスファルト道が終点となり、分岐となっている。石が並べられ車止めのようにになっているが、看板「尾根道経由三池岳」にしたがって右に進む。左は谷道経由で八風峠に向かう道。分岐を通過するとすぐに広場（旧射撃場跡）に出る。ここで班ごとに整列し、スタートを待つ。

広場を出発すると広い沢沿いの道となり、左に沢音を聞きながら歩く。まもなく右に登山口があり、ここが本コース登山道の入り口である。



登山道入り口

ヒノキの植林の中をトラバース気味に進んでいくとすぐに崩落地が目に見えてくる。平成20年9月の豪雨によって鈴鹿山脈は大きな被害を受けたが、ここもその名残である。登山道はこの崩落地の縁を巻くようにして高度を上

げていく。まもなく尾根の上に出るとそこは崩落地の真上となっていて、ヒノキの植林も姿を消す。尾根上に出るもののすぐにその尾根を左側にはずれピークを巻くように進むが、まもなくそのピークから西にのびる尾根に出る。「崩壊迂回路」の看板が立っている。

なだらかなコルを通過すると、傾斜が急となり、ここから標高差約350 mの急な登りとなる。途中手を使って岩場を乗り越える地点があり注意が必要。トラロープが下がっているが、全体重をかけるような使い方ではなくバランスの補助程度に使用したい。しっかりとホールドとスタンスを確かめて三点支持で登るのが基本。いったん登り



岩場

切り、花崗岩が風化した白い尾根の棚が30 mほど続くが再び急登となる。イワカガミの群生やシャクナゲが目を楽しませてくれるコースだ



福王山分岐

が大会の時期には残念ながら花は終わっている。看板に「福王山（ふくおうざん）難路」と

ある分岐を直進すると、この急登もまもなく終わりとなる。登り切ると尾根が広がりお菊池に到着する。傾斜もゆるみ尾根も広いので休憩に適した場所である。周辺には、ベニドウダン、アセビ、シロヤシオ、ミズナラ、ブナ等の植物が見られる。広い尾根道がしばらく続く。一部、



お菊池

ガケの上部でザレ場になった箇所を行くが、足下に気を付ければ危険はない。展望が開け、右手には鈴鹿セブンマウンテンの一つ、竜ヶ岳(りゅうがだけ)がたおやかなスカイラインを見せている。三池岳はピークに上り詰めたという実感がわからないところにあるが、れっきとした三角点が設置されている。ここから指呼の距離のところに、割れた石の看板などで再び三池岳の表示が現れる。花崗岩の露岩が点在し、この後



県境稜線上の三池岳

目指す釈迦ヶ岳やそれに至る縦走路を見渡すことができる。

ここからは滋賀県と三重県の県境稜線上を歩くことになる。細かいアップダウンを繰り返す。ミズナラ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデが見られるが、立ち枯れしているものも多く、シカの食害が考えられる。また、シロヤシオの老木やアセビが頻繁に見られる。シロヤシオは5月～6月頃には白い花を咲かせ、これを目当てに訪れる人も多い。八風峠手前の小さなコルに分岐があり、右に道を分けているが、ここは直進する。そうするとすぐに八風峠に到着する。



八風峠

鳥居があり、広いので休憩に適している。右に進むと滋賀県側の杠葉尾(ゆずりお)に下ることになり、左にとると出発地点の八風キャンプ場へつながる谷道だ。再びアップダウンを経て長細いピークの左をかすめるようにしながら、ルートは次第にそれまでの西南西からほぼ南に向かうようになる。そうするとまもなく中峠である。右へ下ると滋賀県側の仙香谷(せんこうだに)、左へとると八風キャンプ場である。

中峠通過後最初の小ピークは、仙香山と名付けられ看板が立っている。そこから数十メートル緩やかに下ると、右手奥に水面が見えてくる。少し稜線から外れてはいるが、こんなところに…と思うほどの池がある。仙香池(せんこういけ)と呼ばれているこの池は静かなたたずまいを見せ、縦走の疲れを一時癒やしてくれる。



仙香池

このあたりの縦走路は所々花崗岩が風化したザレ地が現れ、そういうところではふもとの田園から伊勢湾にかけての景色を楽しむことができる。稜線上では珍しくわずかに水の流れる小沢がルートを横切っていて三重県側の谷へ向けて流れ落ちている（天候次第では涸れることもあるだろう）。小沢をまたぐと登りとなり、細かいアップダウンを越えていく。途中三重県側に伸びる尾根に入っていき道もいくつかあるが、分岐は明瞭ではなく入り込んでしまう心配は少ないが、念のため、時々地図とコンパスで進路の方角を確認したい。いくつめかのコルを過ぎ、登りが続くと感じたらもう釈迦ヶ岳の登りにさしかかっている。釈迦ヶ岳 (1091.9m) のピークは展望はあるが狭いので大人数の場合は休憩に適さない。その先にある釈迦ヶ岳分岐 付近が比較的広々としている。



釈迦ヶ岳分岐

この分岐を右折しさらに県境稜線を南下していく。相変わらずのアップダウンを重ねながら猫岳 (1058m) に到着する。猫岳直前のコルから左後方を振り返ると、朝明溪谷から釈迦ヶ岳に至るルートである松尾尾根（まつおおね）がみえている。キレット状の難所「大陰（おおかげ）のコル」が荒々しい姿で印象に残る。



大陰のコル

猫岳のピークを過ぎると小さなアップダウンを繰り返しながらも全体的には緩やかな下りとなる。途中 908m ピークではほぼ直角に右に折れることになるので注意しよう。そこを過ぎたら白滝谷（しらたきだに）の分岐を左に取る。ここで県境稜線から一時離れることになる。沢沿いの道を少し下り、小沢を飛び越すように渡ると羽鳥峰林道へ下りる分岐が出てくるが、ここは直進しよう。そうすると急に視界が開け、目前に白い花崗岩の岩峰が見えてくる。ここが羽鳥峰である。岩峰のすぐ右をすり抜けザラザ



羽鳥峰

ラな下りをスリップに注意して進むとすぐに羽鳥峰峠に到着する。ここは鈴鹿山脈の憩いの場のようになっていて、高校山岳部員にとっても

ホッと一息付ける場所である。三重県高体連登山部の部報『羽鳥峰』はここからその名をいただいた。付近には羽鳥峰湿原もあり、ゆっくりと休憩したい。

一息ついたら峠の分岐を左に取り、その後しばらくは急な下りとなる。階段状に石が配置され急な割に歩きやすい。しかし、濡れていたり落ち葉が積もっていると滑りやすいので注意しながら下ろう。一旦下りきると右からの土砂崩れで埋まりかかった河原に出る。ここの堰堤の右脇がルートとなっている。ロープが張られた急下降を慎重に下ると次の河原に出るが、こ



堰堤脇の急下降

もルートは堰堤の右脇を通っている。左側に滑

落しないように細心の注意を払いながら通過すると、すぐに次の「なわだるみ堰堤」脇を下ることになる。これは石組みの堰堤で明治時代後半に作られたもので国の登録有形文化財である。上部がたるんだ縄のようにカーブを描いて



いるため、そのように呼ばれている。自然石をくみ上げて作られているため、景観に溶け込んでいるような印象を与える。特に下部は晴れていてもしぶきがかかって濡れていることが多いので、足の置き方に注意して滑らないようにしたい。ここを下りきれば後は危険箇所はない。渡渉して左岸を歩き出すようになると羽鳥峰林道の出合いはすぐそこである。



砂防学習ゾーン

羽鳥峰林道に出るとすぐそこに、なわだるみ堰堤の文化財登録の碑が二つ並んでいる。羽鳥峰林道は所々陥没もあるが、途中から舗装路となる。青々とした芝生が植えられた砂防学習ゾーンを過ぎ、山荘や別荘が目につき始めたらよいよ朝明溪谷に到着である。ここは夏になると川遊びやバーベキューをする家族連れや若者、あるいは学校単位で自然体験をする子どもたちなどで大変賑わうところである。アスファルトの大きな朝明溪谷駐車場手前まで来ると看板があり、それを目印に右に折れ、吊り橋を渡ると、ゴールとなる朝明茶屋キャンプ場に到着する。



朝明茶屋入口

(2) 御在所山・国見岳コース (A3・B3)

「御在所ロープウェイ」の駐車場¹でバスを降車する。ここにはトイレがあるが、大きくはないので混雑が予想される。できる限り幕営地で済ませておきたい。班ごとに整列し、出発を待とう。駐車場を出発し、ロープウェイの建物のすぐ左脇を通って、階段を下りていく。階段は一部急で狭くなっているところがあるので、慌てず進もう。県道 577 号に出たらすぐに右折し、アスファルト道を進む。いざない橋を渡り、三滝川の流れを右手間近に見ながら進む。途中右手に赤い橋が見える。対岸にある大石公園に渡る橋である。川床には「湯ノ山の巨石」といわれる大石があり、日本で一番大きな御影石ともいわれている。公衆トイレがあるが小さい。

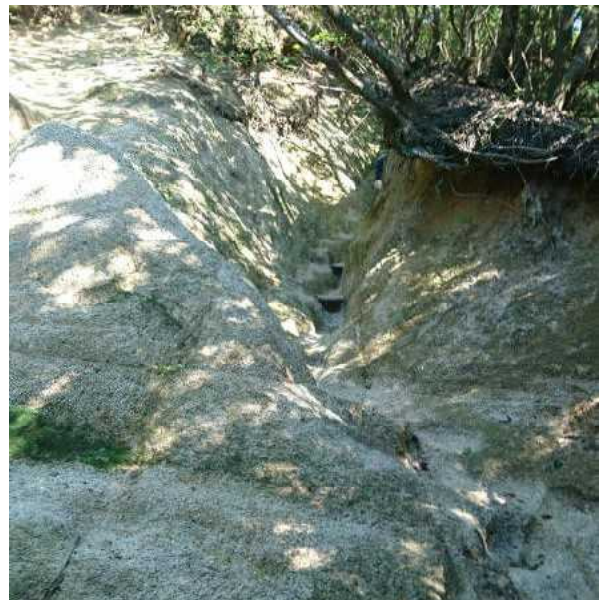
ここをすぎてもう一度橋を渡ると次第に川から離れる。少しずつ高度を上げながら依然としてアスファルト道を進むが、まもなくそれも終点となり、鈴鹿スカイラインに合流する。ここは以前鈴鹿スカイラインが有料であった頃、料金所があったところで、今は大きな駐車場となっている。御在所山や鎌ヶ岳に登ろうとする登山者が駐車する格好の場所である。ただし、今歩いてきたこの道からは車止めがあるため直接スカイラインに車を乗り入れることはできない。

車に気を付けながらスカイラインに沿って 100m ほど進むと道の右側に、「御在所岳中登山道口」の看板や登山届けを提出するポストが見えてくる。ここからようやく登山道にはいる。御在所山には数多くの登山道があるが、「中道」はもっとも入山者数が多い道である。それは奇岩や大岩、キレットと呼ばれる難所など変化に富んだルートであるだけでなく、尾根通しであるがゆえに樹林がとぎれたところからの展望がすばらしいからである。しかし、難所といえるところが点在しているため、しっかり集中して歩きたい道である。



登山道入口

登山道にはいるとすぐに風化した花崗岩の道となる。階段状に掘れて登りやすい面もあるが、急登となったり、大きな段差となっているところもあるので気を付けたい。



風化した花崗岩の道

この付近には、アカマツ（針葉樹）、コナラ、リュウブ、シロモジ（落葉広葉樹）、ソヨゴ、サカキ、シキミなどの常緑広葉樹の低木が多い。登山口から標高差で約 150 m ほど登ると、「裏道」への連絡道の分岐となる。道標が 3 本も設置されていて見過ごすことはない。



ここを右にとると、やがて裏道に合流し、藤内（とうない）小屋、国見峠を經由して御在所山に登ることができる。この分岐を過ぎた後の急登が緩むとトラバース気味に進む地点となる。ここで上方を見上げると、頭上をロープウエーが通過するのが見える。

再び大石のゴロゴロした急登となるがそれも長くは続かない。まもなく4合目の看板とともに負ばれ岩が見えてくる。確かにその名の通り、巨石がもう一つの巨石に背負われているように見える。このあたりからヒノキ、アカマツ、リョウブに混じって、シロヤシオ(落葉広葉樹)もみられるようになる。

階段状になったり、両側からせり出した花崗岩の間をすり抜けるようにして通ったりと、変化に富んで飽きないルートが続く。やがて5合目に至るが、ここにも巨石が点在している。あれほど高く見えていたロープウエーの白い鉄塔が、ずいぶん間近に見えるようになっていて驚くかもしれない。ここも展望がよく、左手には鎌ヶ岳、右手には釈迦ヶ岳、そして背後には伊勢湾を背景に伊勢平野が広がっている。

傾斜が急になり、手を使って岩場の段差を乗り越えていくようなところが何カ所か現れる。油断せず確実に通過したい。やがて地蔵岩と呼ばれる奇岩が登山者を迎えてくれる。二つの巨石の上に菱形の岩が絶妙なバランスで載っていて、これが頭となって、地蔵様が手を合わせているように見える。地蔵岩通過直後、ほぼ北にのびる尾根の派生点に分岐があるが、トラロー

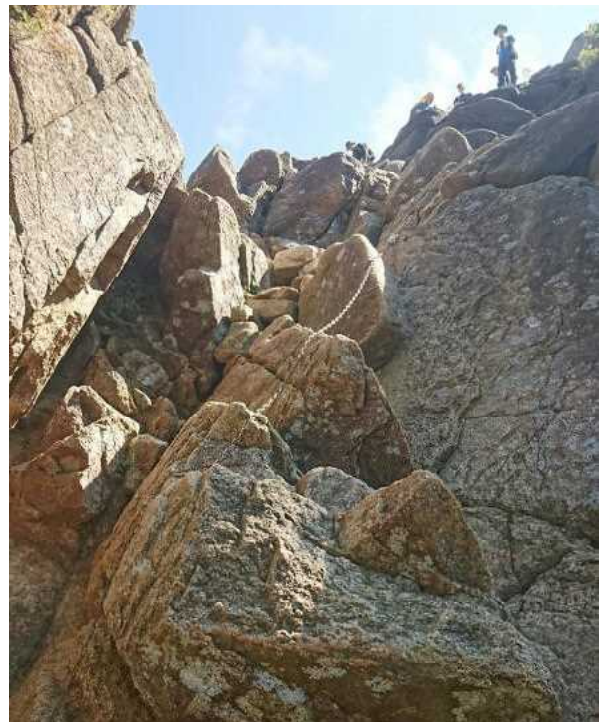
プが張られている。入り込まないようにしたい。



地蔵岩

傾斜が緩んでコル状になったところは右側がガケとなりザレ場となっている。右奥に見える釈迦ヶ岳に気をとられて足を踏み外さないようにしたい。

次に出てくる 919m の小ピークが6合目となっている。ここからの急な下りがキレットと呼ばれる難所だ。クサリが設置されている。



キレット

確実な3点支持で慎重に下ってほしい。この後急登が続く。右へ屈曲する地点で木のハシゴをのぼる。老朽化が進んでいるので一人ずつとりつきたい。7合目の看板を通り過ぎ、右手

に天狗岩やゆるぎ岩などの奇岩が点在する国見尾根を見ながら、ゴツゴツした大石の急登を上り詰めていくと、前方に大きな岩壁が見えてくる。トラロープとクサリのハシゴが掛かった大きな石を慎重に乗り越し、さらにクサリ場を越えていくとやがて展望が開け、巨石の点在する8合目に至る。右手には遙か遠方に鈴鹿山脈の最高峰御池岳（おいけだけ）まで見通すことができる。



8合目

ここからは巨石の連なった尾根からはずれ、岩尾根の基部をトラバースするようにしてアップダウンを繰り返す。クサリ場となっている箇所もあり、慎重な行動が求められる。最後に再び尾根に戻るようにして急登を登りきると御在所山の頂上部である。分岐となっているので道標に従って朝陽台広場に向かう。



朝陽台広場

御在所山の頂上部は広大で、この日の行動では三角点のあるピークは踏まないが、ロープウエー駅間近の展望台（朝陽台広場）が最高地点となる。

この周辺にはツツジ類（サラサドウダン、ベニドウダン、シロヤシオ）が多い。ロープウエー駅のトイレが利用できる。

朝陽台広場からほぼ北にのびるアスファルト道を下ると、大きな石組みの道標がある分岐に出る。この道標の裏側に国見峠や裏道へ続く登山道の入り口がある。



石組みの道標

この登山道に入り、途中小沢を渡渉してまもなく国見峠に到着する。国見峠から国見岳は右



国見岳への登り

後方の眼下に藤内壁を見ながらの登りとなる。花崗岩の大岩の間を抜けたり、ザレ場の縁をたどったりで気は抜けないが、気持ちのよい登りだ。藤内壁は、関東の三ッ峠、六甲のロックガーデンとともに「日本三大岩場」として名高く、この岩場で訓練し、世界の高峰を制覇した登山家も数多い。

国見尾根への分岐を通過し、すぐに「石門」

への道を左に分けると**国見岳**の頂上である。頂上は狭く灌木と大岩で展望はきかないが、この大岩の上に登ると眼下が見渡せる。



国見岳山頂

頂上直下より灌木の中の道となるが、油断していると道を失いやすい。赤テープと踏み跡を頼りに慎重に進む。しばらくして急な下りとなる。花崗岩の岩盤やそれが風化した状態の道だ。スリップしないように注意したい。傾斜が緩むと時々視界が開け、国見尾根や下界の展望が望める。道標のある分岐を「腰越峠（こしごえと



腰越峠方面への分岐

うげ) 三岳寺」方面に右折し、緩やかな道を進むと、1081mの小ピークに「ブナ清水」への分岐看板がある。ここを左折してブナ清水に向かう。始めは緩やかに下る尾根を行く。右手眼下には本日下山していく朝明溪谷が見えている。それもまもなく終わり、地図上では確認できないような細かい尾根や谷を何度も越える。ここも赤テープなどの目印を見失いやすいので気をつけたい。直角に左折を指示する看板を見

つけるとブナ清水はもうすぐだ。ブナ清水はその名の通り、ブナの森の中に岩の間から湧き出す水が流れている。この山域の憩いの場所である。ブナ清水を離れるとすぐに沢沿いの道となり、足下に清水の流れを見ながらの下りとな



ブナ清水

る。しばらくこの沢沿いの道が続くが、やがて沢から離れ左斜面をトラバースするように進む。こうなると根の平峠直下の分岐は近い。この分岐を右に折れるとしばらくは急な下りとなる。常に濡れているような岩の下りもあるので、スリップに気をつけたい。伊勢谷の流れに沿うようになると、河原歩きとなる。最初の堰堤を左脇から越えるとすぐに川の右岸に渡渉する。川沿いに付けられた道をたどって再び広い河原に出たところで再度渡渉。ここの堰堤も左脇を越えていく。このあたりから少し道が広くなり、足下が劣化したコンクリート道となっていくつかのカーブを過ぎる。堰堤を右に見ながら再び登山道となり、小さい木橋を渡る。道がほぼ直角に左に折れ、ますます広い道となる。次に出てきた山荘の脇を通って進み、立派な橋を渡ると羽鳥峰林道に合流する。ここからは前日に歩いたルート通りに朝明茶屋キャンプ場に向かう。

(3) 鎌ヶ岳・御在所山コース(A4・B4)

バスは前日と同じ「御在所ロープウェイ」の駐車場までの配車となる。役員の誘導でスタート地点まで進む。スタート地点は県道 577 号の手前。このコースはチーム行動となる。スタートに当たっては役員の指示に従ってほしい。スタートしてから大石公園付近までは行動 2 日目のコース案内を参照のこと。大石公園への橋の直前で U ターン気味に左へ折れ、ホテルの裏手を進む。三嶽寺(右)へ向かう分岐にでたら、ガードレールの向こうに回り込むようにして、寿亭の従業員駐車場へいったん入る。



三嶽寺への分岐

駐車場内を数十メートル進んだところで左の細い側道に進入する。



駐車場脇の細い側道へ

廃屋になった旅館の脇を通り石段を登っていくと、三嶽寺の観音山周遊道に入っていく。点々と道の脇に立つ石仏が出迎えてくれるだろう。しばらく登ると三嶽寺の建物や湯の山温泉街、視線を上に向けると、ロープウェイが動いているのが見える。いくつものつづら折りを過ぎて高度を上げると、小さな展望台に着く。ここから本格的な山道となり、「馬の背登山口」の看

板がある。



小さな展望台

登山道に入ると程なく明瞭な尾根道の急登となる。途中傾斜が落ち着き、棚状となるがそれもつかの間、再び急登となる。ここを頑張ると、緩やかな尾根となり、CP1 は近い。CP1 は小ピーク手前の尾根が少し広がった地点。両側にアカマツが点在している。ここから先は尾根上



CP1

のアップダウンを繰り返しながら次第に高度を上げていくことになる。途中主尾根から左右に尾根を分ける地点がいくつかある。ロープが張られているところもあるが、地図やコンパスを使って支尾根に入り込まないようにしたい。722 m のピークは「湯の峰」(ゆのみね)と呼ばれているがピークは狭い。看板には 717.1m と表記されている。ここを通過すると、足下は風化した花崗岩の白が目立つようになり、付近の樹林もまばらになって明るい縦走路となる。これまでほぼ西進していたルートは次第に南西に向き、休憩に適している広いコルを過ぎて急登を

一登りすると、大きく広がる傾斜の緩い尾根となる。樹間から目指す御在所山が真横に見える。なだらかな登りをしばらく進むと **CP2** となる。ここも尾根が左右に広がり、休憩に適



CP2

している。ここでは耳を澄ませるとすぐ北を流れる長石谷（ながいしだに）の音が聞こえてくる。犬星（いぬぼし）の滝という立派な滝が落ちる音である。なお、長石谷は最後には県境稜線に駆け上がり、岳峠に達する。また、ここまでの植生は、モミ、アセビ、リョウブ、タカノツメ、ミズナラ、クマシデ、アカシデ、アカガシ、アカマツ、ホオノキ、シャクナゲ、イワカガミ、ショウジョウバカマなどが見られる。

CP2 をすぎ標高を上げていくと、白ハゲに出る。ここは雲母峰から鎌ヶ岳への縦走路上にあ



白ハゲの分岐看板

る三叉路分岐ともなっていて、分岐を右に向かう。白ハゲと呼ばれるこの一帯は、花崗岩の露岩が点在し、急な崖となっていて樹木もまばら

なために、遠目から見ても白くてよくわかる。シロヤシオ、オオバヤシヤブシ、クマシデ、ア



白ハゲ

カシデなどが目につく。景観に目が奪われがちだが、地形の特質上急な斜面や岩を乗り越えていくところが多く、ロープが張られているところもあり、慎重に行動したい。



白ハゲの悪場

白ハゲの緊張する悪場を通過するとまもなくカズラ谷分岐となる。この分岐を左に下ると、四日市市側にある宮妻峡キャンプ場に出る。不測の事態が起こったときのエスケープルートとして利用できる。道標に従ってここを右に進む。もうまもなくで県境稜線に出るが、ここから岳峠までのルートは谷側がかなり急な崖状になっているところもあり、しかもササなどでそれとわかりづらいのでルートを踏み外さないように注意したい。県境稜線まであと 100m もない地点に分岐があり、ここを看板に従って右（岳峠

・鎌ヶ岳方面)に進む。



ショートカット分岐看板

ここはショートカット気味に直接岳峠に達するルートであり、ブナの天然林とササの中をトラバース気味に進むことになる。岳峠の分岐を右に進むとまもなく長石谷ルートの分岐に着



岳峠

く。ここにも岳峠を示す看板があるので先ほどの分岐と紛らわしいが、両者が至近距離にあり、便宜上このようになっているのだと思われる。長石谷への分岐となっているこの地点が **CP3** である。



長石谷分岐(岳峠) CP3

CP3 から見上げると鎌ヶ岳ピークは指呼の距離である。鈴鹿山脈随一の鋭角なピークを持った山である。ここでチェックを受け、監督の先生が待つピークへ向かう。正面に見えている岩峰の右へ回りこみ、右の小さな岩峰とのコルを目指してまずは登る。かなり急な登りとなるが、とくに落石を起こさないように注意して登って



CP3からの鎌ヶ岳

ほしい。ピークからは360度の大自然で、隣の御在所山はもちろん、名古屋から伊勢方面にまで連なる海岸線や入道ヶ岳(にゅうどうがだけ)や宮指路岳(くしろだけ)など鈴鹿山脈中南部の山々、また、滋賀県側にある雨乞岳(あまごいだけ)などが見渡せるだろう。ここからは監督と合流し、楽しみながら最後の鈴鹿の山を堪能してほしい。ただ、登山行動であることを忘れず、危険箇所では慎重に行動してほしい。

鎌ヶ岳ピークから下り始めるとすぐに急斜面のトラバースがある。また、武平峠まではいく



急斜面のトラバース

つもの急下降があり、しかも、人気の山なのですれ違いも多いと思われる。慎重な行動が必要である。登山道の脇にはイワカガミ、ショウジョウバカマがみられる。ブナ、ミツバツツジ類、シロヤシオ、ベニドウダンの林の中を急下降し武平峠に降り立つ。峠を通過するとすぐに御在所山への登りとなる。白ハゲのような花崗岩が風化したザレ場のような所を過ぎると両側から木が覆い被さるような急登となる。つづら折りではなくまっすぐな急登である。そのうちに樹



急な岩場 三点支持で

林が途切れ露岩を三点支持で登る地点に出る。これより上部には度々このような場所が出てきて展望もきく。足下を走る鈴鹿スカイラインがよく見えている。

登り切ると広場状の平坦地に出る。ここを通過すると急にアスファルト道が出てきて驚くかもしれない。アスファルトの道に出たら左へ道なりに進む。「長者池 八大龍王」と書かれたろうそく型の石碑と鳥居の前を通り過ぎ、東屋を右に見てさらに進むと御在所山頂上に向かう階段を見つけることができるだろう。そうする



御在所山頂上への階段

と山頂の一等三角点はすぐそこである。監督の先生と写真を撮り、一休みしたら冬はスキー場となる広々とした草地のルートを通してロープウエー駅に向かう。ゲレンデを最奥まで突っ切



ゲレンデの中の道

ると再びアスファルト道となる。行動2日目に通過した、見覚えのある石組みの大きな道標に従って右進するとロープウエー乗り場である。役員の指示に従ってロープウエーに乗車する。このロープウエーは1959年に開通し、途中に立つ白い鉄塔の高さは61mで日本一である。



また、直線距離は2.1km、標高差780mとなっている。ぜひ15分間の空中散歩を楽しんでほしい。行動2日目の中道ルートと今日歩いた馬の背尾根の全貌を見渡すことができるだろう。負ばれ岩や地藏岩を見つけることができるだろうか。麓駅に着いたら役員の誘導で少し離れた「御在所ロープウエイ」社員駐車場に移動し、解団式となる。